

ティーチングポートフォリオ（2022年4月）

1) 教育の責任

所属している食物栄養学科では、短期大学全体の教育理念・目標に依拠し、「根拠に基づきながらも対象者によりそった栄養の指導と給食の提供をできる栄養士」の育成を目標としている。私は、「食品学基礎実験・食品学実験・食品衛生学実験・解剖生理学実験・生化学実験」に実験助手として携わっており、栄養士免許の取得に必要な科目に指定されている。そのため、科学的根拠とは何かを判断できる栄養士を育てたいという思いをもちながら学生と接している。また、「栄養士実力認定試験対策講座」では解剖生理学を担当している。アドバイザーは1学年を担当している。

また、入学前教育スタッフも担当しており、スクーリングや入学前学習会を通して、栄養士を目指す高校生と一緒に『食』について学んでいる。

卒業生のキャリアアップ支援を目的とした「管理栄養士免許取得のための勉強会」では、食べ物と健康を担当している。

2) 教育の理念

弘前大学農学生命科学部を卒業し、農学生命科で研究し修士を取得した（2014 年度）。専攻は生化学・分子生物学であり、生命現象を化学的に研究する学問である。高校生のころから、生物の細胞の仕組みについて興味があり、大学・大学院では一貫して「細胞でのタンパク質の翻訳メカニズムに関する研究」に取り組んだ。研究するにあたり、当然、化学の歴史やその成り立ちを講義で勉強するが、多くの命の犠牲のうえで化学、そして現代医学が成り立っていることを学ばせていただいた。3年半に及ぶ研究室生活では、核酸やタンパク質を「ナノ」「ピコ」とときには「オンゲストローム」単位、つまりは原子レベルで物質を扱ってきた経験をさせていただき、責任をもつ・慎重さ・器用さ・効率・危機管理の大切さを学んだ。同期と先輩・後輩と先生からは、学び続ける姿勢・批判する勇氣・アクションを起こし実行する・論理的判断をする・公共の利益に努める・大事なところと大事ではないところの見分け方、といった教科書での勉強以外のたくさんの大事なことを教わった。結局のところ、先生方や先輩方の発言や行動を振り返ると「カラスは黒ではなく白だという科学的な結果をだしたのならば、どんな偉い先生に対してでも、はっきりと白だと主張しなさい」ということを教えてくださっていたのだと気づいた。

栄養士は、食べ物を通して『イノチ』と向き合う仕事であると考えている。科学的根拠をもとに、美味しく健康で元気に過ごすための食事を提供できる資格である一方で、万が一、アレルギー患者に対し『アレルギー物質の入った食品』を提供してはならない。美味しそうな食べ物にあふれてはいるが食品表示があいまいな現代において、アレルギー患者が自身

で身を守ることは難しく、私は『乳化剤』のアレルギーをもつが、入院中にアレルギー食品を提供されたが気づかずに食べてしまい、大事に至った経験もある。つまり、献立を作成する栄養士などは【乳化剤とは何という化学物質名なのか】を理解していなければならない。

このように、大学・大学院で学んだこと、自信がアレルギー患者であるという事実を踏まえ、「科学的根拠とは何かを判断できることは、人の命を守ることに直結する」という事実を学生には知っていただきたいと思う。

また、6年間の学生生活で、とくに大学1・2年のときに大きく足りていなかったと後悔していることは、大学の講義において、その他大勢がいるなか、先生の問いかけに相槌を打つ、あるいは自発的に答えることができる学生は少なく、自信もそうであったことだ。考えもなくその場において板書をとっているだけであった『ノーリアクション』ぶりは、社会に出てからは一切通用しないものだとは日々痛感している。そのため、社会に出てからは「意見を伝える努力」をしている。

以上の経験から、私の教育理念と目的は「臆せずに意見を伝え、科学的根拠とは具体的に何であるのかを判断できる栄養士を育てる」こととしている。

3) 教育の方法

実験の授業中に、自信でとった板書のノートや、電子媒体の資料に書かれていることを確認せずに作業をし、確認をせずに質問をしてくる学生が大半いるが、しっかりと確認するように言い伝えている。もし『キウイ』と『キュウリ』を聞き間違えたり、書き間違えたり、打ち間違えたりすると、対象者の命に関わる国家資格であるからである。栄養士が働く現場ではヒューマンエラーを防ぐための個人レベルでの危機管理がなされているが、やはり、学生時代からのノートのとり方、聞き間違い・書き間違い・打ち間違いをしないことからだと考えている。

また、栄養士実力認定試験対策講座では解剖生理学を担当しているが、「点数を取らせることに特化」した内容にしており、そのために過去12年ぶんの試験問題を分析した。具体的には、ガイドラインの項目における問題の分類、頻出問題の出題パターン、出題サイクル等の分析を行った。この分析結果を踏まえ、対策講座を行っている。

4) 教育の成果

栄養士実力認定試験対策講座の解剖・生理学に関して、50期生は短大平均点以上の得点には至らず、力不足を実感した。頻出問題のみ対策講座内で扱ってきたが、問題の傾向が変わり、頻出問題以外の知識を対策講座内で丁寧に扱う必要があると反省した。

そのため、51期生には配布する資料の『ボリューム』を増やすこととした。具体的には、過去12か年分の過去問題すべてを分野ごとに細分化した資料を指す。51期生の結果は、全国平均点を上回る結果となった。7題出題されるうち全員が3問以上正解し、学生自身が頑張った結果である。栄養士実力試験の結果を通じて、学生と共に成長していることを実感

している。